

やがて音訓を教える時期がくる

幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないように、最初は、文字の上でも、両者の共通点に気づかないでしょう。しかし、必ず、いつかは気づくはずで、両者の共通点に気づいた時が、実在である牛と牛乳との関係を教える時になります。その時「ぎゅうにゅう」が牛の乳であるから、この言葉を表わすのに“牛”という字を使って、これを“ぎゅう”と読んでいるのだよ」と教えるのです。

つまり、幼児の発見、もしくは疑問を待って教えるべきもので、それなくして、単に音訓の知識を授けて、幼児にその知識が得られたとしても、恐らく実効は少しもないでしょう。

それよりも、幼児に、発見することの喜びを与えることです。これは学問の方法と喜びを与えるに通じるのですが、単に音訓の知識を授けることは、この発見の喜びを幼児から奪ってしまいます。

そればかりではありません。与えられた知識は失われやすいものですが、自ら発見したこと、もしくは疑問に対して教えられた知識は、

心に深く刻まれて、なかなか忘れないものです。親は、何でも教えたいがりますが、同じ知識でも、授けられたものと、自ら発見したものとは、その働き、その価値の上に大変な違いがあることを知らなければいけません。

それに、教えてもらうという受け身の学習ばかりしていると、意欲に欠けた人間に育ってしまう恐れがあります。その意味からも、できる限り、子ども自身に発見させ、発見する喜びを知らせることが、なにごとにも意欲をもち、能力のある人間に育てることに通ずる道なのです。